「アラモ砦」事件をめぐる史実と伝説の相克
―生き証人による語りの伝承における問題を中心に―

牛　島　　万

はじめに

1821 年メキシコがスペインから独立したことを機に、メキシコ領テキサスに米国南部からオースティン（Stephen Austin）をはじめとする 300 世帯が合法的に入植してきた。入植当初はその人口は 1200 人程度（1823 年）だった米国人も、1835 年には 2 万 5000 人から 3 万人までに増えていた（メキシコ人は 4000 人～7800 人）。やがてメキシコの法や慣習を遵守しない無謀な米国人入植者が増えたこともあり、1829 年には奴隷制の禁止、翌年には米国人の入植を禁止する法令まで発布されるに至った。しかし、さほどその効果はなかった。さらに 1824 年以来の連邦制が 1835 年に中央集権制に移行し、ますますテキサスの自治は制限されていった。このような中央政府の動きに対する反対運動はすでに 1835 年のゴンザレスでの叛乱を皮切りにテキサス各地に広がっていた。これを阻止すべく、首都メキシコ市から遠征隊を自ら率いてテキサスの叛乱を鎮静しようとしたのが当時の大統領で軍総司令官でもあったサンタ・アナ（Antonio López de Santa Anna）である。

1836 年 3 月 2 日、テキサスは分離独立を一方的に宣言し、暫定大統領にバーネット（Thomas Barnett）、副大統領にロレンソ・デ・サバラ（Lorenzo de Zavala）が選出された。サバラはメキシコから亡命してきた自由主義者であった。そして進攻しつつあるサンタ・アナ遠征軍に対抗すべくテキサス軍は体制を整え、その準備に余念がなかった。その矢先にアラモ砦（The Alamo）での事件が起こったのである。当時、爆薬庫として使用されていた旧スペイン領のミッションであるアラモ砦に一部のテキサス叛乱軍が籠城した。当初サンタ・アナ軍はアラモ砦に直進してくるとは予想もしていなかったが、同軍は 2 月 23 日にサンアントニオに

到達し、アラモを包囲し始めた。そして包囲されて 13 日目の 3 月 6 日午前 5 時、まだ薄明の世界に閉ざされていたアラモ砦への襲撃が開始された。1 時間もかからないほどで決着がついたと言われている。中にいた総勢 180 数人が絶命した [(1)]。サンタ・アナの配慮により、戦士の妻など女性や子供、および 1 名の黒人奴隷は解放された [(2)]。

今日、テキサス州サンアントニオには修復されたアラモ砦があり、多くの観光客が訪れる代表的な名所になっている。独立や自由の歴史を観光化したアラモ砦を始めとする歴史的遺産はサンアントニオの一つの表徴にもなっている。そしてアラモ砦事件は熱心な史実探究の対象になっているだけでなく、同事件から生まれた数多くの神話や伝説が社会的影響を与え続けている。そこで筆者は、神話や伝説が生まれる一つの理由として、言説の伝承過程が関係していると考える。本稿の目的は、アラモ砦事件に関わる「史実」と、これが「伝承」された結果、史実と相克している事例をいくつか取り上げ、従来の研究者の見解をふまえて再考することにある。

1．サンタ・アナは奴隷解放者であったか否かという言説の背景

サンタ・アナの給仕係にベン（Ben）という元奴隷がいたのは事実で、このベンがアラモ砦の遠征時に同行していたと言われている。彼はもともと米国艦隊の戦艦の中で給仕を務めていた。それをアルモンテ（Juan N. Almonte）がメキシコに連れ帰ったとされている。さて、元奴隷のベンに限った話ではないが、いわゆる当時の社会的弱者による直接の語りではなく、多くが人の言い伝えや又聞きのケースがほとんどである。従って、その伝承の過程で事実が歪曲されることも稀ではない。

ニューウェル（Chester Newell）の『テキサス革命史』のなかでベンの言説が扱われている。アラモ砦事件の 1836 年 3 月 6 日の前夜から当日朝にかけてのエピソードである。サンタ・アナとアルモンテはサンアントニオの同じ家に滞在していたが、ベンは彼らの食事の世話をしていた。決行の前日からメキシコ軍は作戦に余念がなく、夜通しサンタ・アナとアルモンテがコーヒーを呑んで起きてい

たので、自分は床にも付けなかったと半ば不平をもらしている。当日サンタ・アナは少し苛立っていたらしく、コーヒーをベンにひどく急かしてつくらせた。アラモ砦の一連の出来事が終わり、サンタ・アナとアルモンテは襲撃当時アラモの外にいたが、その後ベンはアラモに同行するように命じられた。そしてベンは、トラビス（William B. Travis）とボウイ（James Bowie）の亡骸はどれかと尋ねられたので、彼は指を差したのであった。

では、どうしてベンはトラビスとボウイを知っていたのであろうか。これについては、エドワード・スティフ（Edward Stiff）の『テキサス移民』のなかで、ベンは以前ワシントンでクロケット（David Crockett）に会ったことがあるので認識できたとし、おそらくトラビスやボウイのことも何かで覚えていたのであろう、と解説しているが、ジョー（Joe）と勘違いしているのではないかという説もあり、本当のところは不明である。

そこで、アラモ砦に関わったもう一人の奴隷、つまりトラビスの奴隷であったジョーについてみておこう。彼はサンタ・アナに命乞いをし、それが認められた。その後、ディキンソン夫人（Susanna Dickinson）と並んで重要な行き証人の一人として数えられたが、この言説もまた「伝承」である。1836 年 4 月 11 日付けの『ニューオーリンズ商業時報』編集者あての匿名の手紙のなかで、「私はこの黒人の少年から聞いた」と前置きをしたうえでジョーの言説が述べられている。これによると、おそらくメキシコ人と共通する血が流れていたからこそ、命が救われたのではないかと考えていたようである。人種差別を受けていた者が哀れにもその「負」の思考に完全に感化されていた観がある。ところで、ジョーは 1813 年か 1815 年の生まれとされており、1836 年当時、すでに 23 歳から 26 歳になっていたはずで、すでに少年とはいえない年齢に達していた。従って、少年の黒人となると、ベンのことと勘違いしていたのでないかと思われる。

ジョーについてもう少し述べておこう。ジョーの目の前で主人のトラビスが亡くなったとき、ジョーの本心はどうだったのかは不明である。映画の世界では、ジョン・ウェインの『アラモ』（1960 年制作）では確かトラビスの身代わりにジョー（ただし青年ではなく年配の人物として描かれていた）が槍にさされて亡くなるというシーンが出てくる。さらに 1987 年制作のバード・ケネディ監督の『ア

ラモ 2』では、主人の亡骸を抱いて涙しているジョーが描かれている。ところが2004 年制作のジョン・リー・ハンコック監督の『アラモ』では、目の前で亡くなった主人トラビスを見て、急に闘争心を失せ、奥に隠れて身をひそめるジョーが登場している。

別の言説をみてみよう。アラモ砦の戦いの場面である。まず主人が倒れ、立ちあがれないところへ、メキシコ軍がはしごをよじ登って中に入り、トラビスに止めを刺したのはモラ将軍であった。剣で一突きであった。150 人のほどの人間が素手で武器を持つメキシコ兵を相手に勇敢に戦っていた。トラビスの亡骸は銃剣で何度も突かれた。コス（Martín Perfecto de Cos）大佐は剣の切れ味を楽しんでいた。ジョーはアメリカ兵の息の根が完全になくなるまでメキシコ兵は刀で突き刺していたと発言した。ジョーを救ったのはメキシコの将校バラガン（Manuel Barragán）隊長だけだった。もう一人の隠れていたワーナー（あるいはウォーカー）は最終的にサンタ・アナの命令で処刑された。何人かのネグロとメキシコ人夫人がいたが彼らは全員助かった。一人の黒人の女性だけは流れ弾に当たって死んだという [(3)]。別の史料によると、この女性はベティ（Bettie）であると思われる [(4)]。ジョーによると、彼女は戦いの最中に逃げようとして撃たれたという。アルスバリーの妻（Juana Navarro Alsbury）とその姉妹も命拾いした [(5)]。

戦いのあとで、一人のメキシコ軍将校が英語で「ここにネグロはかくれていないか」と探し回っていた。そこで、ジョーは即座に、「はい、ここにいます」と名乗り出た。すると 2 人の兵士に捕まえられ銃と剣をつきつけられたので、一瞬のすきをねらって逃げようとした。そのとき一人の兵士が彼を撃とうとしたが、それを制止したのがバラガンであった。そこにサンタ・アナが登場してきた。ジョーの描写によると、サンタ・アナは細身だが立派な体形をしており、比較的背は高い。はっきりした顔立ちで、容姿はすばらしくはつらつとしている。服装は極めて地味でメソジストの牧師のようだった。ジョーは数日拘束された後解放されたという [(6)]。

ところが、ディキンソン夫人の言説によると、最後にジョーは逃亡したように述べられている。ところで彼女の語りもまた新聞記者の言説のなかで処理されているのである。ディキンソン夫人の言説をみてみよう。以下、要約である。

しばらく自分の運命がどうなるのか不安であったが、やがてメキシコ軍のイギリス人大佐[7]がやってきて、メキシコ人は女を殺すためにきたのではなく、男と戦いに来たのであると言った。アルモンテの尽力で、スザナは子供とともにそこを離れることを認められた。その前に地方長官であったムスキスの家に連れて行かれ、それから馬車で町を離れた[8]。しかしサラド川まできたとき、彼女は草むらに隠れていたトラビスの奴隷を見つけた[9]。むこうもディキンソン夫人に気が付き、草むらから出てきた。戦いで負傷していた 75 人についても全員殺されたと聞き、驚いた。トラビスの奴隷はしばらく同行していたが、15 マイルほど進むと、前方から誰か 3 人（2 人という言説もあり）がやってくるのが見えた。ディキンソン夫人は格別怖がっていなかったが、奴隷はコマンチ・インディアンではないかと一瞬恐怖を感じた。しかし、それはテキサス軍であることがわかった。彼らは全員が「白人」と知り大いに喜んだ[10]。

前掲の 1878 年のオハイオ州新聞では、トラビスの奴隷のベンと述べているが、これはジョーの間違えであろう。1881 年の『サンアントニオ・エクスプレス』紙のディキンソン夫人の言説ではこの点を改め、トラビスの奴隷と明示し、ジョーの名はどこにも出てこない[11]。ところで、ジョーが草むらに隠れていたのが事実だとすれば、ディキンソン夫人はサンタ・アナの給仕係であるベンとともにアラモを無事に出て、彼のエスコートで馬車は進行していったと解釈できるが、果たして、この馬車にジョーが含まれているのか否か、両方の見解がある。例えば、1840 年の『テキサス移民』では、「この児童（ベンのこと）とトラビスの奴隷といっしょに、ディキンソン夫人はテキサス軍のいるグアダルペ川のゴンザレスまで護衛についた」とされている[12]。

メキシコ人ノンフィクション作家のタイボ（Paco Ignacio Taibo）によると、サンタ・アナはトルネル宛ての回状のなかで、黒人奴隷はメキシコ領に入ってきたという事実を持って自由人となる、と述べている。これはサンタ・アナが奴隷制に対して反対の立場にあったという一つの根拠であると主張している。サンタ・アナはアングロサクソンの最大の悪事である奴隷制を廃止する目的をもってテキサスにやってきたと述べている[13]。

2．ディキンソン夫人をめぐる言説

生き証人のなかで最も脚光を浴びてきたのは白人女性であったディキンソン夫人であろう。ただこれもまた多くは「伝承」である。ディキンソン夫人の場合は数社のインタビューを受けている。しかし記者の話には誇張部分も少なくなく、果たしてディキンソン夫人の言なのか、記者の言なのかがわからない。というのは多くは間接話法で記者の言葉に置き換えているからである。実際、ジョーとは別のところに身をひそめていたディキンソン夫人がいかにして外の戦いの風景を知り得たかという根本的な疑問が残る。ではディキンソン夫人であるスザナ・ディキンソン（後世スザナ・ハンニング）の言説をみてみよう。以下、要約である。

嵐のような戦いが始まって終わるまで1時間もかからなかった。トラビスに事前の許可を受けていたのでクロケットは弾薬に火をつけようとしたが、その矢先に殺された。テネシー州出身のデイビー・クロケットは西部の偉大なハンターであったが、彼の死もその人生にふさわしい限りの華やかなものであった〔下線部は筆者による〕。彼と彼の仲間はたくさんの襲撃隊に取り囲まれていた。クロケットらはテキサスの自由のための祭壇の生贄としてささげられていたはずなのに、クロケットの顔はいつもと変わらなかった。まだその死に顔は、まさに彼の森や平原の野獣を追い求める精力的な人物のそれに他ならなかった。まさにテキサスのための殉教者として、テキサスが彼を呼んできたのだ。トラビス大佐は塀の上に乗って仲間に喚起の声をあげていた。するとやがて彼は二度目の銃弾を浴び倒れた。そのときメキシコ軍のモラ将軍はすかさず彼のもとに走り、剣で止めをさした。それでもトラビスは残りの力を振り絞って、逆にモラに切りつけた。すると、お互いの立場が逆転した。やられたものがやりかえし、二人の亡骸は永眠に深い眠りに陥った。

ところでトラビスのネグロは解放された。メキシコ兵が彼に言っていたのは、彼の主人は勇敢だったと。その言葉自体がすでに一つの墓碑銘である。それはテキサスの勇士に刻まれているし、きっとトラビスの墓にも刻まれることであろう。ジェイムズ・ボウイ大佐は数日間病床の身にあり、その病床で殺された。

彼の亡骸はひどい損傷を受けていた。

生気を失った経験はわれわれの語りの理由となった。そしてわれわれは今後もそれを続ける。ディキンソン夫人とその女児、ボウイとトラビスのネグロも命拾いした〔下線部は筆者による〕。

われわれの死者はキリスト教の埋葬される権利を否定された。われわれは彼の灰をかき集めて墓に入れてあげよう[14]。

敵はこの戦いで死者負傷者合わせて1500人にもなったということである[15]。

以上は、ディキンソン夫人の直接の語りはない。従ってディキンソン夫人の語りの伝承に疑わしい点がないわけではない。つまり、数人と隠れていたディキンソン夫人が外でおこなわれている戦いで要人がどのような最後を遂げたかということについて実に克明に記憶していることである。考えられることは、拘束されているときに知り得たメキシコ軍の特定の軍人や兵士からの情報がおそらくディキンソンの言説の一部と化していることである。

ところで、下線部はとりわけ問題点を含んでいる。まず、「デイビッド・クロケットの死」についてである。要するに、デイビッド・クロケットは戦闘中に殺されたのか、あるいは戦いが終わったあと仲間とともに処刑されたのか、という論争がある。例えば、先のディキンソン夫人の言説によると、どちらとも判別がつかない。ディキンソン夫人の当該言説では「仲間のハンターとともに」という記述があるだけで、描写の時系列が定かではなく、処刑されたとも明言されていない[16]。本件についてはあとで取り上げたい。

もう一つは、「ボウイのネグロ」の存在については史料にもとづく確証がとれていない。なぜならば、その他ほとんどの言説にはボウイの奴隷の言及は見られず、ディキンソン夫人の別の言説にはこの情報は記されていないからである。さらに1876年のディキンソン夫人の言説ではジョーが唯一の黒人であったと述べている[17]。

他方、言説はフィクション性が含まれていることが明らかな「物語」や「伝説」を自由に創作してしまう。従来物語や映画の世界ではよく見られたが、ディキンソン夫人とサンタ・アナのラブコメディーが誕生したほどである。もっともこれ

を生みだした原因はディキンソン夫人の言説、より正確には他者により伝承されたディキンソン夫人の言説にあった。次の節である。

> ディキンソン夫人の脱出は彼女が囚われたときと同じほどの恐怖を伴うものであった。サンタ・アナはディキンソン夫人に子供も一緒にメキシコに行かないかと提案した。サンタ・アナは彼女がテキサス人としてこの中（アラモ砦）での恐ろしい話の伝承を恐れていたし、またその結果、サンタ・アナは自分自身で彼女を殺してしまうかもしれないという衝動に悩んでいたからだ。ディキンソン夫人は述べているが、われにかえって自分の置かれている現実に直面したとき、彼女は悲しみに打ちひしがれ、数日自分の感情を制御できない状態にあった[18]。

この言説はディキンソン夫人の3年後の言説にはない[19]。しかしサンタ・アナがジョキンソン夫人に関心があったという物語はラブコメディーの様相を呈し、歴史から外れた独自のフィクションの世界を展開していったのである[20]。

3．トラビスをめぐる言説

ここでは2点について取り上げよう。一つは有名な「トラビスの線」（Travis's Line）の問題である。もう一つは、トラビスはサンタ・アナ軍の攻撃を受ける前にすでに降服を考えていたかどうか、についてである。

トラビスがアラモ砦に立て籠っている部下に最後の選択をさせた有名な「線引き」の問題である。砂地に線を一本引いて、ここに残りたい者は線を越えてこちら（トラビスの方）に来させたという事件は、病床にあるボウイをメキシコ兵が襲撃するという場面と同じほど、従来のアラモ砦に関する映画や小説の中でよく描かれている有名なシーンである。まず本件の確証については、当然メキシコ軍ではなく、中にいたテキサス軍となるわけであるが、結果的に生き証人であるディキンソン夫人、および襲撃を受けた当時は現場にいなかったが、病床のボウイの看病をしてアラモ砦に出入りをしていて偶然現場を目撃したとされる通称マ

ダム・カンデラリア（Andrea Castañon de Villanueva）の言説からこれが証明されている。

ディキンソン夫人の言説は 1881 年の『サンアントニオ・エクスプレス』紙上で紹介されている。

> トラビスはみんなを集め、剣で砂に線を引き、こう言った。わが兵士たちよ、これから私は自分に課された運命を受け入れるつもりである。私の考えに従う者はここ(アラモ砦)にとどまることを認める。でも出て行きたい者は出て行ったらよい。では、私が引いたこの線を越える者は、さあ、こっちに来い[(21)]。

またマダム・カンデラリアは後世アラモ砦に纏わる言説を語る最後から 2 番目の生き証人であった。1785 年にテキサスのラレドで生まれた彼女は 1899 年頃に亡くなったとされるが、すると優に 100 歳を越えてまで語り部であったわけである[(22)]。ちなみに最後の生き証人はエンリケ・エスパルサ（Enrique Esparza）であったとみられる。当時、彼は自分の父親に連れられて母親と弟といっしょにアラモ砦の中に立て籠っていた。事件当時 8 歳であった。閑話休題、マダム・カンデラリアによる言説は 1899 年に『セントルイス・リパブリック』紙上で述べられているが、これも彼女の言説の伝承である。

> マダム・カンデラリアはトラビス大佐の言った内容は覚えていないが、彼が地面に自分の剣で線を引いたのをちゃんと覚えている。そしてトラビスはテキサスのために死ぬ覚悟のある者は全員こちらに来いと言った。彼ら全員がすみやかに線を越えてトラビスの側に渡った。ただし二人だけが残った。そのうちの一人はすみやかに砦から姿を消した。もう一人はジェームズ・ボウイであった。彼はがんばって立ちあがろうとしていたが、それができなかったからだ。彼の瞳からは涙がこぼれていた。そして彼はこう言った。「みんな、誰も俺をそこまで連れて行ってくれないのか」と。デイビー・クロケット大佐とその他の何人かがすぐさま彼の寝ているベッドに近づき、その勇敢な男を運んだ。マダム・カンデラリアは、クロケットがしゃがみ込み、しばらく小さい声で彼と

何かを真剣に話しているのを見ていた。

ところで、この線引きの話をいち早く語ったのはまぎれもなくこのときに一人アラモから脱出したルイス・モーゼズ・ローズ（Louis Moses Rose）であった[23]。しかし、これまたローズの直接の言説ではなく、伝承である。しかもローズがアラモから逃げた先がズバー家であった。詳細はわからないがそこの主人がローズと知人で、ローズが一連のアラモ砦の中での出来事について語ったとされている。そしてその妻が子供であるウィリアムにこの話を初めてしたのはアラモ陥落から20年以上たってからであった。しかも、このウィリアムが自書ではじめてこの事実を明かしたのはさらにそれから15年ほど経った1873年のことであった。そしてなぜか、先に述べたディキンソン夫人もマダム・カンデラリアもこれ以降「線引き」の件について語り出すのである。ローズの語りの伝承が「線引き」の意味が詳細にわかるような背景の描写が鮮明である分だけ、脚色の部分が含まれている可能性を念頭に入れて批判的に読んで行かなければならない。では、1873年のウィリアム・ズバーによる「アラモ砦からの逃亡」から、関係ある場面に関する言説についてふれておこう。1836年3月3日早朝、トラビス大佐は軍隊行進をさせていた。やがて彼は皆にむけて演説し始めた。演説はローズの語りによると相当長いものであった。以下、要約である。

トラビスは、自分はこれまで援軍が来ると皆に嘘をついてきたが、この理由を今からどうか聞いて容赦していただきたい、と述べた。本当は今でも援軍が必ず来ることを期待しているが、現実に何も起きていないのである。メキシコ軍の接近は予想外に早い。わが同胞にこのわれわれの置かれている状況が情報として伝わっていないのではないかと思う。ファニン大佐（James W. Fannin）へ使いの者を送ったが一向に戻って来ていない。考えられることはメキシコ軍の手中に陥っているか、あるいは経路が遮断されているかである。私は助けが来るまでここに留まることに決めた。同じ考えの者はここに残ってほしい。しかもメキシコ軍の兵隊数がわが軍の20倍以上であり、ここから脱出することは不可能である。またメキシコ軍が降伏を要求してきているが、これに服する

ことは屈辱であり、本砦が彼らの巻き起こす嵐で乗っ取られる可能性があっても、これまでわれわれ一人一人が銃剣をもってその脅威を退けてきた。わたしはここで正直に現状について話さなければならない。周囲はメキシコ軍に囲まれ、われわれを殺すことぐらいは朝飯前である。戦力もない現状では決してわれわれは助からないと考える。われわれはだからといって敢えて降伏はしない。そのことはここに掲揚されている黒旗が物語っている。敵軍によって輸送経路が遮断されたら 10 分とかからないうちにわれわれは破滅であろう。あとはここに最後まで残って戦うだけである。われわれは全員虐殺されるのは時間の問題である。サンタ・アナは容赦なく行うであろう。我々は死の運命にある。我々は命を生きながらせることはできなかったが、死に様を選択することはできるのだ。そこで 3 つの選択を与えよう。第 1 は、一人のメキシコ人も撃たないうちに降伏する。第 2 は、メキシコ軍を通り抜けるわれわれの行く手を遮断し、敵軍の 20 人も殺さないうちに滅多切りにされること。私はこのいずれも拒否する。

そこで残された選択は、アラモ砦で戦い、自分たちの命を売ることである。メキシコ軍を出来る限り殺すべきだ。我々全員の命が果てるまでやるべきだ。そうすることで、きっと敵の勢力を弱め、我々の同志が事を解決してくれるだろう。そして独立を獲得してくれるだろう。独立だけではない、われわれの国と家族のための財産と幸福もである。そこでみな一人ひとりに採択をもとめる。降伏したい者はそうすればよい。ただし逮捕され極刑になるかもしれない。あるいは逃げたい者は逃げればよい、でもメキシコ軍に周囲を囲まれているので、100 ヤードもいかなうちに殺されるかもしれない。でもそれも自由だ。私の選択は、ここにとどまり祖国のために死ぬことである。生きている限りは戦いぬくことである。私は一人だけになってもこの気持ちは変わらない。みんな自分たちのやりたいようにしてくれ。私といっしょに死んで、死の瞬間に私を安堵させてくれる者はいないか。こう話してから、トラビスは自分の剣で地面に一本の線を引いたのである[(24)]。…

以上みてきたように、最後のズバーによるローズの言説では、「線引き」という象徴的な出来事に焦点は置かれていない。かわりに他のディキンソン夫人やマ

ダム・カンデラリアの言説と異なり、「線引き」に至る前置きとなる背景が詳細に描かれている。換言すれば、ローズ言説はもう一つの論争、トラビスが最初から降服を考えていたかどうかという点についてもここで一定の回答をわれわれに与えているように思う。つまり、トラビスは降服を受け入れようとしていたのではなかったことがわかる。セギンのことであると思われるが使いの者を派遣し、打開策に乗り出していたのである。しかし、結果的にその使者も戻らず、絶望の最中にあったことは事実である。そしてその意味で、生きてアラモ砦を出る期待をほぼ完全に捨てていたことがわかる。線引きの段階で、3 つの選択肢のいずれも「死」を伴っており、その点で一定の覚悟を決めるに至っていた。従って、独立の自由を追求する彼らには、それとは逆にその遂行前からすでに「自由」はなかったことを意味していた。せめて立派な死に様を見せつけ歴史に名を連ねたいという最後の自由願望が働いた結果が、アラモ砦の虐殺の背景にあったわけである。そしてこのことが、トラビスが最初から「死」を望んでいたという飛躍的な解釈にまで発展したと考えられる。

４．ディビッド・クロケットの死をめぐる言説

デイビッド・クロケットの死をめぐる論争は近年最も注目を浴びているものである。これまでデイビッド・クロケットはトラビスやボウイなどとともに戦いの最中に死んだと考えられてきた。映画の描写も 1960 年のジョン・ウェイン監督の『アラモ』もその後の『アラモ２』の中でもそれを忠実に受けて描写している。しかし 2004 年のジョン・リー・ハンコック監督の『アラモ』では、これを完全に否定し、クロケットを最後まで生かし、最終的にサンタ・アナを冒涜し屈しなかった彼は極刑を受けて果てるというシナリオで終わっている。この見解は実は 1830 年代の史料に既に登場している。しかしそれはごく少数派に支持されていたことと、まさに「伝承」の様相を呈していたため軽視されてきたという経緯がある。その史料とは､米国新聞の匿名の記者と自称する人物の報告（1836 年 7 月）とドルソンの手紙（George Dolson）の 2 つである。両者とも米国人による確証のない「伝承」であり、現場にいたはずのメキシコ人からの言説ではなかったた

めである。従って、これらの言説は無視され続けたのである。

ところが、当時このアラモ砦にいたメキシコ軍副官デ・ラ・ペーニャ（José Enrique de la Peña）の手記が遺されていることが初めて世に公表されたのが 20 世紀の半ばになってからのことであった。アラモ砦当時、1807 年生まれのデ・ラ・ペーニャは 29 歳であった。その彼が書き残していた手記を誰がどのようにこれまで保管していたのか、どうしてこれが 20 世紀半ばに公表されなければならなかったのかについて、同手記を 1955 年にメキシコ市で出版したサンチェス・ガルザ（Jesús Sanchez Garza）は全く明かしていない。このことが同デ・ラ・ペーニャ史料の信憑性を低めている所以であろうと思われる。その後、同手記の写本をピアース（John Peace）が購入し、これをテキサス大学サンアントニオ校の特別コレクションに寄贈した。1975 年、ペリー（Carmen Perry）によりこれが英語に翻訳され出版された [(25)]。そこには以下のような記述があった。

決して愉快でないこの出来事、つまり卑劣な殺戮が冷淡さだけを生む結果となってしまった同事件の話題にサンタ・アナが話を移そうとしたときに、すでにその闘争心の高まりもどこかに行ってしまったあとだった。大虐殺のあと生存者が何人かいた。カストリジョン (Manuel F. Castrillón) は彼らを助けようとしていた。そしてカストリジョン将軍は彼らをサンタ・アナの前に連れて行った。彼らの中には背の高い、体格の良い、まあまあの容姿の男がいた [(26)]。（中略）彼こそ自然主義者のデイビッド・クロケットであった。米国では有名人な冒険家で、国じゅうを旅し、ベハル（サンアントニオ）にやってきていた。その彼が驚いたことにこのアラモに自ら志願して立て籠っていたのである。よそ者としての彼の資質が重視されていたのである。カストリジョンが間に入って何か言ったが、サンタ・アナはひどく立腹している様子を体全体で表現しながら、捕虜をすぐに撃つようにそばにいた兵隊に命じた。他方、上官や将校たちも嫌気がさしていたが、もしその憤りが最初の段階で高まっていたら、おそらく彼らの命は救われたはずだろうが、実際その反対の声は起こらなかった。この危機的瞬間にもし大統領閣下（サンタ・アナのこと）がおられなかったら、きっと側近の何人かの将軍たちがその不名誉な行為で悪名高い存在になっていたで

あろう。兵士たちの残忍性は高まり、自分たちの上官を賞賛する意味で彼らは身を前に乗り出した。そこで無防備なこの者たちに対し、握っていた剣を振りかざしたのであった。これではまるでトラが餌食を食うのを同じである。彼らは処刑される前に拷問を受けた。これらの不幸な者たちは悲痛な声をあげていた。しかし自ら処刑台にあがることに恥じてはいなかった。これを行っていたのはラミレス・イ・セスマらであったようだ。ただし確証はない。なぜなら私はその現場にはいたが、この残虐な場面を見ないように隅の方にいていたからである。どうか忘れないでほしい同胞の者たちよ、残酷な瞬間とは全ての人間に極度の恐怖心を与え、われわれを動揺させるものである。それがたとえ、ほんの少し前には復讐の念を渇望していたにせよ、である。卑劣にも彼らの剣を血で染め不名誉にさせた者たちに対する、溢れんばかりの憤りの気持ちを今も断固持ち続けているのであろうか。私はあのときの出来事に躊躇いを感じ、つねにその時の犠牲者の哀れで痛々しい声が今も私の耳元には聞こえてくるようである[27]。

デ・ラ・ペーニャの史料の評価についてふれておこう。1998 年、同手記はオークションにかけられ、それを購入した者からテキサス大学オースティン校の米国史センターに寄贈された。これを機に 2000 年 5 月、同センターでシンポジウムが開催された。そこで話題になったのは、デイビッド・クロケットが果たして処刑されたか否かであった。この永遠の疑問を解決してくれると期待されていたデ・ラ・ペーニャの手記であるが、議論はこの信憑性の検討に集中した。リンドリー（Thomas Ricks Lindley）はデ・ラ・ペーニャの手記そのものの信憑性ではなく、むしろその写本の信憑性に問題があるのではないかと指摘した。他方、デイビス（William C. Davis）は同写本の信憑性を問う以前に、クロケットの処刑そのものに信憑性がないと反論した。このように、学説ではデ・ラ・ペーニャの史料に対する信憑性は低く、かつこれに代わる史料も存在しないため、現時点でクロケットの処刑の事実は認められないというのが多数派の学説の立場である。しかし映画や小説の世界では、史実の確証を無視し、デ・ラ・ペーニャの言説が少なからず支持されているようである。

おわりに

以上みてきたように、史実と言説の相克という問題が根本的にあるが、そのうえで、言説が個人の語りではなく、まさに伝承過程において、他者の語りにすりかわっていることが、二重の歪曲の可能性を高める要因になっている。本稿ではその幾つかの事例をみてきたが、最後にメキシコ軍の死傷者数に関する同様の問題について考えてみたい。

メキシコ軍の死傷者数は 370 人から 1600 人と実に数値に幅がある。この幅は何を意味しているか。まず史実を追究するための軍のデータが希少で、どうしても憶測の数値に依存しなければならなかったことがある。メキシコ軍側の史料でも数値が分かれており、これがかえって史実への到達を困難にさせている。370 という数値はおそらくアルモンテ将軍の報告している数値である [(28)]。これは完全に少なすぎるが、この数値を報告した背景について推察することは別の意味で重要であると考えられる。他方、ディキンソン夫人は 1500 人という数値を挙げている [(29)]。ディキンソン夫人は確かに現場にいた生き証人ではあったが、戦ってもいない本人が、しかも敵軍の人数をどうして把握できたかという根本的問題もある。そうなると 1500 前後という数値はメキシコ軍からの情報と考えた方がよさそうである [(30)]。それでも従来、アラモ砦事件が人々の関心の的であり続けてきた背景に、生き証人の語りとしての言説、及び他者によって伝承された言説が「史実」に、また他方で神話や伝説などの「物語」と化したからに他ならない。これらの相克のなかで歴史学者はどのように真の史実を探究し続けていくことが可能なのか、アラモ砦事件をめぐる論争を通じて改めて考える良い機会となっているのではなかろうか。

注

(1) Donald S. Frazier, *The United States and Mexico at War: Nineteenth-Century Expansionism and Conflict* (N.Y.: Macmillan Reference, 1998), pp.6-7. 180 人から 189 人の間であったとされる。史料によっては 170 人台もある。メキシコ人 8 人ないし 9 人が含まれていた。3 月 1 日、ゴリアッドからの援軍 32 人が最後に加わる。Richard Bruce Winders,

Crisis in the Southwest: The United States, Mexico, and the Struggle over Texas (Wilmington: Scholarly Resources, 2002), p.24.

(2) 拙稿「リオ・グランデ境界の軍事化と米墨戦争 ― テキサス戦争から米墨戦争までの戦間期を中心に ―」(『アメリカス世界のなかのメキシコ』天理大学アメリカス学会編所収、天理大学出版局 , 2011 年), pp.49-69.

(3) Bill Groneman, *Eyewitness to the Alamo, revised edition* (Lanham: Republic of Texas Press, 2001), p. 28.

(4) Groneman, *op.cit*., pp.110-111

(5) Timothy M. Matovina, *The Alamo Remembered: Tejano Accounts and Perspectives* (Austin: University of Texas, 1995), p.68.

(6) Groneman, *op.cit*., p.28

(7) カストリジョン（Manuel F. Castrillón）であろうと思われるが、彼は将軍であるがディキンソン夫人の言説の原文通りにした。

(8) 本言説では詳細を述べていないが、他の言説によると、ディキンソン夫人を含む女性や子供たちはまず一晩ムスキスの家で拘束された。そのときブランケットとわずかなお金が与えられた。翌昼、一行はサンタ・アナの面前に連れて行かれ、そこで個別にサンタ・アナと会話した。そして全員の解放が認められ、ディキンソン夫人の場合は、娘のアンジェレーナとともにアラモ砦をメキシコ軍の護衛隊の先導で離れたとされている。Matovina, *op.cit*., pp.66, 88.

(9) 1878 年チャールズ・エバーズによるディキンソン夫人へのインタビューでは、このネグロをジョーではなく、ベンと間違っている。Groneman , *op.cit*., p. 97.

(10) Groneman , *op.cit*., pp.97, 100.

(11) *Ibid*., pp.99-100.

(12) *Ibid*., pp.62-63.

(13) Paco Ignacio Taibo, *El Alamo: Una historia apta para Hollywood* (México: Planeta, 2011), p.102; Fred Anderson and Andrew Cayton, *The Dominion of War: Empire and Liberty in North America, 1500-2000* (N.Y.: Viking, 2005), p.270.

(14) Raúl A. Ramos, *Beyond the Alamo, Forging Mexican Ethnicity in San Antonio, 1821-1861* (Chapel Hill: North Carolina Press, 2008), p.162. メキシコ系のセギン（Juan Seguín）が最後彼らの遺灰を埋葬したと言われている。

(15) ディキンソン夫人の証言による。Groneman, *op.cit*., p.20

(16) *Ibid*., p.20

(17) *Ibid*., pp.92-93.

(18) *Ibid*., p.97.

(19) *Ibid*., pp.98-101.

(20) The Alamo Documentary: Investigates the History, Myth and Popular culture of the Alamo, Delta Entertainment Corporation, 2004. に詳しい。

(21) Groneman, *op.cit*. p.99.

(22) Matovina, *op.cit*., p.57.

(23) ローズをめぐる論争については、Thomas Ricks Lindley, *Alamo Traces: New Evidence and New Conclusion* (Lonham: Republic of Texas Press, 2003), pp.173-247.

(24) Groneman, *op.cit*., p.83-84.

(25) *Ibid*., p.212.

(26) Burt Hirschfeld, *After the Alamo: The Story of The Mexican War* (N.Y.: Julian Messner, 1966), p.85.

(27) José Enrique de la Peña, Carmen Perry trans., *With Santa Anna in Texas: A Personal Narratives of the Revolution* (College Station: Texas A & M University Press, 1975), pp.53-54; Groneman, *op.cit*., pp.210-211.

(28) *Ibid*., p.34

(29) Frazier, *op.cit*., pp.6-7; Groneman, *op.cit*., p.20

(30) de la Peña, *op.cit*., p.20.

引用文献

Anderson, Fred and Andrew Cayton, *The Dominion of War: Empire and Liberty in North America, 1500-2000* (N.Y.: Viking, 2005)

de la Peña, José Enrique, Carmen Perry trans., *With Santa Anna in Texas: A Personal Narratives of the Revolution*, College Station, Texas A & M University Press, 1975.

Frazier, Donald S., *The United States and Mexico at War: Nineteenth-Century Expansionism and Conflict*, N.Y., Macmillan Reference, 1998.

Groneman, Bill, *Eyewitness to the Alamo, revised edition*, Lanham, Republic of Texas Press, 2001.

Hirschfeld, Burt, *After the Alamo: The Story of The Mexican War*, N.Y., Julian Messner, 1966.

Lindley, Thomas Ricks, *Alamo Traces: New Evidence and New Conclusion*, Lonham, Republic of Texas Press, 2003.

Matovina, Timothy M., *The Alamo Remembered: Tejano Accounts and Perspectives*, Austin, University of Texas, 1995.

Ramos, Raúl A., *Beyond the Alamo, Forging Mexican Ethnicity in San Antonio, 1821-1861*, Chapel Hill, North Carolina Press, 2008.

Taibo, Paco Ignacio, *El Alamo: Una historia apta para Hollywood*, México, Planeta, 2011.

Winders, Richard Bruce, *Crisis in the Southwest: The United States, Mexico, and the Struggle over Texas*, Wilmington, Scholarly Resources, 2002.

牛島 万「リオ・グランデ境界の軍事化と米墨戦争 ― テキサス戦争から米墨戦争までの戦間期を中心に ―」(『アメリカス世界のなかのメキシコ』天理大学アメリカス学会編所収、天理大学出版局、2011 年）.

映像資料

『アラモ』監督・主演 ジョン・ウェイン 1960

『アラモ 2』監督 バート・ケネディ 1987

『アラモ』監督 ジョン・リー・ハンコック 2004

The Alamo Documentary: Investigates the History, Myth and Popular Culture of the Alamo, Delta Entertainment Corporation, 2004.